

京都経済短期大学『今瀬ゼミ卒業論文集 -自治と協働による地域づくり-』

ゼミナール研究発表会 2018.12.20 今瀬ゼミ卒業論文要旨集 (1/2頁)

ゼミ生17名(五十音順)各卒業論文フルペーパー、各14,000以上(図表除く)、査読付、2018.11.7

京都経済短期大学 今瀬ゼミ卒業論文集  
「自治と協働による地域づくり」(発表会 2018.12.20 要旨集)  
(卒論71ペーパー、各14,000字以上(図表除く)、2018.11.7)

●沖末生那「地域で行われるごみ拾い」  
●兼松裕未「西京区のまちづくりイベントを通して、感じる西京区」  
●久米将太郎「祇園祭について」  
●下谷相太「フロアポーツによる地域活性化」  
●青戸雄太「大阪府城東区の地域環境」  
●竹中暹香「駅と住居の周辺環境が作り出す利便性と街づくり」  
●田中晶子「京都市西京区の暮らしのサポート」  
●田畑優奈「鳥取市の祭り」  
●田中晶子「京都市西京区の暮らしのサポート」  
●堀達彦「京都府祭例と効果」  
●西川美緒「商店街活性化計画」  
●林明澄「祇園祭のごみ問題」  
●お祭りから日常生活へ」  
●林茂寿「淀川花火大会で地域の活性化」  
●福山久留美「アルパカ依存症と地域の理解」  
●松本匠平「京都市内での清掃活動」  
●松本佑太「地域のごみ拾いボランティア」  
●山田大輔「読者の祭で地域活性化」  
●渡野佑也「現代社会の税金の使われ方の問題と犯罪者の存在価値とは」  
<17名、五十音順、査読有>

地域で行われるごみ拾い(沖末生那)  
(15,262字/今瀬ゼミ卒業論文集P1~17/査読有/2017.11.7)

今瀬ゼミのテーマは「自治と協働による地域づくり」である。筆者は世界や地域における課題とされているごみの問題を研究した。「もも」には役割を終えて、使えなくなったり、「ごみ」になる時が必ず来るため、その限りある資源を大切に、うまく付き合っていくなければならない。ごみが増えることにより、多くの環境問題につながってしまう。それを防ぐためにも、後の世代に向けて、今できる最小限のことを行うべきなのである。本稿では琵琶湖の環境問題について調査した。少しでも多くの方にこのごみの問題が今非常に深刻であることを知ってもらおうとすることが必要である。少しでも後の世代のためを思って一人ひとりができることを守らなければならぬ。それが今後の難しい課題である。また日本・各地方が抱える「ごみ」の問題には改善課題が多い。地域全体で如何に街をきれいにしていけるか今後取組むべき課題を明らかにした。

西京区のまちづくり  
～イベントを通して、感じる西京区～(兼松裕未)  
(14,762字/今瀬ゼミ卒業論文集P18~31/査読有/2017.11.7)

本稿では、京都市西京区で行われているイベントによる地域づくりについて、筆者自身、行動に参加してその実態を調査した。「西京結ひ」は区民一人ひとりの「得意なこと」や「得意なこと」を持ち寄り、「アケショソ」を生み出している場である。夢や思いを他の参加者と話し、互いに得意なことを組み合わせる。ふれあいまつりは毎年開催される西京区最大のイベントである。2018年度のおふれあいまつりにおいて、参加する団体等の情報をインターネットを使いリアルタイムに発信した。まつりのニーズで参加者にSNSやPCや携帯でのネット操作等を知ってもらいたい情報共有した。同時にまつり情報をリアルタイムでFacebook Re: 洛西川にアップして、ブースに来てなくても参加できるようにした。地づーヌ出展者からの協力も得て、準備段階からFacebookに投稿してもらった。こうして取組みを通して西京区のイベントの美態と課題を明らかにした。

祇園祭について(久米将太郎)  
(14,384字/今瀬ゼミ卒業論文集P32~45/査読有/2017.11.7)

筆者は「祇園祭について」というテーマで、祇園祭におけるごみの量を調べるとともに、一般社団法人祇園祭ごみゼロ大作戦の活動に実際にボランティアとして参加して、「ごみ」の分別活動、祇園祭に出ている露店にその団体が無料で提供するリユース食器を回収する活動、2018年7月に起きた西日本豪雨災害で被災された人たちのための募金活動などを行った。

祇園祭ごみゼロ大作戦は5年ほど前から行っている活動である。年々、リユース食器などで使い捨てのごみを無くしていくというため、ごみの量は減ってきている。しかし、ごみが完全になくならない原因としては、祭りを開催している地域周辺のコンビニ等から出るごみなどがビッグアップされていることがある。そうしたごみを無くするために、地域との連携を図ることが今後のごみゼロにする打開策となっている。

フロアポーツによる地域活性化(下谷相太)  
(15,817字/今瀬ゼミ卒業論文集P46~69/査読有/2017.11.7)

筆者は、地域密着のフロアポーツに意識を向け、地域が活性化するには何なのかを考えた。

本稿では、滋賀県で活動を行っているフロアポーツを取り上げた。フロアポーツは、子供たちに夢や希望を与える。チームを応援することにより地域が活気づき、イメージアップする宣伝効果にもなる。取り上げたチームも、楽しい、面白い、応援したいと思われよう。さまざまな活動のために、知名度もアップし、放映も踏まない。それを埋めるために、SNSなどで呼びかけたり、会場に足を運んでもらうことが重要であることが分かった。

フロアポーツが地域に根付き、応援され、交流を続けていくことが地域活性化に繋がるかと筆者は考えている。

大阪府城東区の地域環境(青戸雄太)  
(15,791字/今瀬ゼミ卒業論文集P70~89/査読有/2017.11.7)

筆者の住む街、大阪府城東区の調子・永田・東中浜の各地域では、ごみが落ちている光景がよく見られる。ゴミ箱が街中になく、ごみは落ちていく。ゴミ箱が落ちていく。その原因を明らかにし、問題解決に近づくための考えをまとめた。

調査の結果、これら地域では2つの問題を抱えていることが分かった。一つは、城東区では人口密度が高い地域でありながら、コンビニが少ない。コンビニのごみ箱を使ってくれないのはいいが、分別が不十分で、拳引ごみ一杯になって溢れている。二つ目は、これら地域には最寄り駅として3つの駅があるが、その駅周辺に落ちているごみの回収が異常に多いことである。この2つの問題を解決へと近づけることにより、大阪府城東区の各地域は今までは違い、環境整備ができ、さらに住みやすい街になることを考える。

駅と住居の周辺環境が作り出す利便性と街づくり  
(竹中暹香)  
(15,595字/今瀬ゼミ卒業論文集P90~108/査読有/2017.11.7)

阪急阪神ホールディングスの子会社、阪急阪神不動産はマンションや住宅を建設している。阪急阪神不動産のマンション「ジョイ」や分譲戸建などのサービスを提供している。主に沿線に住宅地やマンションを建設している。沿線にある物件に住んでもらうためには、周りの各店舗などで形成される街づくりに、買い物に行くためや駅を利用するためのアクセスの良さが重要になってくる。筆者は考える。本稿では、阪急阪神ホールディングスの発足は、其面有馬電氣軌道(現在の阪急電鉄)の創設であることからその歴史を調査した。沿線の住宅経営を始めた歴史と、その周辺にある店舗などについて調査した。また、郊外住宅の「阪急彩都がーチングエス」について調査し、通勤や通学などの帰りに立ち寄る店舗にはどういったものがあるか、利便性がどのようになっているかについて明らかにした。

京都市西京区の暮らしのサポート(田中晶子)  
(14,159字/今瀬ゼミ卒業論文集P109~120/査読有/2017.11.7)

筆者は、京都市西京区の地域事情や教育環境を調査した。本稿を通じて西京区の魅力を伝えるために、さまざまな調査研究を行った。西京区は、桂川や嵐山など、自然が多く住環境がよい。嵐山は大きな竹林や、着物アトリエが有名で、若者たちがインスタグラムをはじめとするSNSを通して、全国に写真を発信し共有している。毎年木下アトリエが有名で、西京区に近いうち(株)周辺も、毎年木下アトリエが有名で、小学校は15校あり、それぞれ「豊かな学力」「豊かな心」「健康や、小中一貫の教育を目指して」ところが多く、保護者も安心出来る教育環境だ。また、西京区の塾・進学教室は、60校をこえている。筆者自身としても、西京区の歴史や教育環境を知ったことは、自己成長に繋がった。

鳥取市の祭り文化は町にどのような影響を与えているか(田畑優奈)  
(14,454字/今瀬ゼミ卒業論文集P121~136/査読有/2017.11.7)

鳥取県で一番有名な祭りは、市内でイベントを開催したり、その様子がメディアに取り上げられた。しかしそれだけではなく、全国規模のイベントに出演したり、海外との交流を深めるための催し物に出演依頼が来ることも増えるようになった。また、祭り自体を利用して傘踊り以外の関連イベントを行うことにより、祭り自体を一層盛り上げ、全体に団結力をもたらすことができる。結果として観光客数が増え、増加している。

しゃんしゃん傘踊りというのは、元は因幡の傘踊りというもので、作物を育てるために雨乞いをする意味の踊りであった。今までの傘踊りの歴史では、市内でイベントを開催したり、その様子がメディアに取り上げられた。しかしそれだけではなく、全国規模のイベントに出演したり、海外との交流を深めるための催し物に出演依頼が来ることも増えるようになった。また、祭り自体を利用して傘踊り以外の関連イベントを行うことにより、祭り自体を一層盛り上げ、全体に団結力をもたらすことができる。結果として観光客数が増え、増加している。

京都経済短期大学『今瀬ゼミ卒業論文集 -自治と協働による地域づくり5』

ゼミナール研究発表会 2018. 12. 20 今瀬ゼミ卒業論文要旨集 (2/2頁)

ゼミ生17名(五十音順)各卒業論文フルペーパー、各14,000以上(図表除く)、査読付、2018. 11. 7

京都府条例と効果(堤達彦)

(14,224字/今瀬ゼミ卒業論文集P137~155/査読有/2017.11.7)

「条例」と聞いたとき、それを知っていたとしても、どのようなものか詳しくはわからない、という人は多いであろう。しかし、それではない。条例は、私たちの暮らしだけでなく、店舗の経営、観光など様々なことと関連しているのである。また、そうした条例を知ることは、私たちの意識を変化させ、より良い地域をつくらんと努力することにつながる。本稿では、景観条例など、いくつかの条例とそれに関連する事例を取り上げ、その効果について調査しまとめている。また、京都市が行ってきた取り組みについても紹介している。条例というと、とっつきにくいイメージはあるが、複数の事例を通して、条例に対する知識や意識が深まることも、今後、地域においてどのように生活し、どのような地域づくりをすべきなのかを考える機会が増えることを期待している。

商店街活性化計画(西川美緒)

(14,559字/今瀬ゼミ卒業論文集P156~171/査読有/2017.11.7)

ゼミのテーマを元にして、商店街の活性化について調べ、現地調査を行った。商店街は、その地域にとって「顔」という存在であるにも関わらず、多くの商店街の現状は、来客数や活気が右肩下がりである。そのため、商店街活性化には、にぎわい作りが必要だと言え、潰れかけた商店街を復活させることで商店街の魅力が高まると考えている。商店街活性化計画を実施するため、筆者は自身の地元(約1000祭り)と「ゴミ拾い運動」に参加した。参加を通じて調査で、商店街は、長年にわたって地域住民から愛されていることが分かった。商店街を盛り上げるためにそうした祭り等が開催され、成功してもと活気良くなってほしいと、地域住民の人が思っているからこそ、祭りに協力的な心と見られる。本調査を通じて、筆者自身も、地元商店街を好きになり、地域の方とコミュニケーションが取れる場所として利用していきたい。

祇園祭のごみ問題～お祭りから日常生活へ～(林明達)

(14,430字/今瀬ゼミ卒業論文集P172~185/査読有/2017.11.7)

筆者は本稿の執筆にあたり、祇園祭ごみゼロ大作戦に参加し、散乱ゴミや使い捨てゴミを減少させるために活動する団体の活動内容を調査した上で、祇園祭のゴミを減少させるために今後、どのようにしていくかについて検討した。祇園祭ごみゼロ大作戦では、ゴミの減量に向けてリユース食器が利用されている。今後はリユース食器の可能性を多くの人に知ってもらい、今以上に利用されること。そして、祭りだけでなく、祭りで取り組まれたリユース活動を日常生活の中に取り入れ、リユースを自分からしていきけるように一人一人の意識が変化することが期待される。そうした思いを込め、私たちの意識次第ですぐに実行できる簡単な取り組みについて考えた。本稿を讀んだ人が少しでも散乱ゴミや使い捨てゴミを出さないように意識が変化することを望んでいる。

淀川花火大会で地域の活性化(林茂寿)

(14,318字/今瀬ゼミ卒業論文集P186~198/査読有/2017.11.7)

本稿の題名にある淀川花火大会は、大阪市淀川区で平成元年から行われている。地域づくりをテーマとするゼミナール研究として最適なものの一つだと考えて研究に打ち込んだ。淀川花火大会には各地方からも数多くの観客が訪れて、毎年大賑わいしており、関西の花火大会ではより美しく花火を観戦できる工夫がされており、これも人気の要因の一つであると思われる。この人気の淀川花火大会が数多くの人に支えられていることがわかった。花火大会が終わった後に出る大量のごみは翌日にゴミ拾いボランティアの手で回収されている。花火大会当日の救護係などもボランティアで行われている。こうしたことから、淀川花火大会は地元の人々の支えがなくてはならないことが分かった。

アルコール依存症と地域の理解(福山久留美)

(14,755字/今瀬ゼミ卒業論文集P199~218/査読有/2017.11.7)

近年問題視されているアルコール依存症。本稿では、その背景にあるアルコール依存症について調査した。新聞・テレビ等さまざまなメディアでアルコール依存症の実態は特集されているが、具体的な解決策や救いの場はあまり知られていない。そこで、大きく分けて二つのものに焦点を当て、論文をまとめた。一つ目は、アルコール依存症に悩む人たちのために発足した「断酒会」という自助グループについて調査し、概要・実態を整理した。二つ目は、アルコール依存症に悩む人だけでなく、その家族の苦悩や対処するべきことにも目を向け、主に「アタルチルト」について調査・整理した。さらに、アルコール依存症は地域社会に及ぼす影響も非常に大きいことから、社会全体が「知識」よりも「理解」を身に付けられれば、地域に居場所が出来、回復速度も早まるものと考え論述した。

京都市内での清掃活動(松本匠平)

(14,164字/今瀬ゼミ卒業論文集P219~231/査読有/2017.11.7)

筆者は、卒業論文のテーマとして、京都市内の清掃活動を取り上げて、それを実践しながら調査を行った。参加した全ての清掃活動において、ごみ問題の深刻さが改めて浮き彫りになった。中でも一番深刻であったのが、祇園祭で出たゴミの量である。

祇園祭ごみゼロ大作戦などの活動によって、年々ゴミの量が減ってきているが、まだまだ深刻な状況である。現在、リユース食器など、使い捨ての容器ではなく再利用できる容器などを使うことによって、ゴミを減らす活動を行っている。

このような活動が多く地域で行われて、少しでもゴミを減らすことができれば、地域の活性化に繋がります。より良い街作りが出来ることを考える。

地域のごみ拾いボランティア(松本佑太)

(14,181字/今瀬ゼミ卒業論文集P232~249/査読有/2017.11.7)

本稿では、ごみの汚染を減らし自然環境を守ることを目的として、その実践活動を通じて調査結果を取りまとめた。筆者自ら、ごみ拾いのボランティア活動を行った。ごみのポイ捨てや不法投棄などをする人に対して、実際にごみ拾いをして見せる場を見せようという目的で行った。さらに地域の人たちにも見せようという目的でSNSなどを活用して多くの人が参加し、自分たちの街でゴミを減らしたいという考えが定着してもらえようと考えた。TwitterやYouTubeキヤスラングなど若者がよく利用するスマホのアプリを活用していった。見る人に興味を引いてもらえるように、ごみの歴史や豆知識を取り入れるなどコラムを挿入した。本稿での活動、調査を通じて、筆者自身もごみへの意識が高まった。

讀伎の祭で地域活性化へ(山田大輔)

(15,951字/今瀬ゼミ卒業論文集P250~274/査読有/2017.11.7)

筆者の出身地でもある香川県坂出市では、少子高齢化が進み、シャッター街が増え活気がない街になってきている。そこで、本稿では祭りを活用し地域活性化につなげようと考え、筆者自ら実践活動を行いながら調査・提言を行った。SNSでの投稿や青年団の方達に協力して頂き、祭りの認知度を高め、興味を持ってもらうことを意識して計画を進めた。SNSを最も多く使用している時間帯に合わせ、1日2回投稿をした。TwitterやInstagramでそれぞれの特色を活かして、目にも止めてもらえるように工夫をした。計画を進めていくなかで見えない問題点も多々あり、そこをどの様に解決し結果へと結び付けていくかが非常に大変であった。結果は、例年の祭り参加者数と殆ど変わらないが、小さい努力を積み重ねることで、次第に大きな結果へと繋がっていく可能性は示された。筆者自身、地元の良いところを改めて実感した。

現代社会の税金の使われ方の問題と犯罪者の存在価値とは(渡野佑也)

(14,225字/今瀬ゼミ卒業論文集P275~287/査読有/2017.11.7)

現在、税金の一部が無駄に使われており、その使い方に様々な問題がある。本稿では、殺人犯、セクハラ、泥棒、強盗、脱獄犯などの犯罪者に対する税金の使い方にについて、現状・課題を調査するとともに、今後のあり方を提言した。犯罪者の刑罰における税金の使い方が自分に関係する人のことをどう思っているか、などといったことについて調べてまとめた。税金で働いている警察官が人のために税金を適切に使用しているか、についてもまとめた。さらに、ニュースになっような理不尽とも思われる税金の使われ方についてもまとめた。地域などで人の上に立つ者が私欲のために税金を使っていることは適切であると考えたからである。本稿で調査・提言したことによって、税金の使い方をしっかりと把握し、良い使い方をしたいと考えている。